

Title	朱子学派教育論の歴史的展開
Sub Title	A historical survey of educational ideas of neo-confucianism
Author	角田, 多加雄(Sumida, Takao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1989
Jtitle	哲學 No.89 (1989. 12) ,p.143- 162
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this article is to trace the dynamic process in the history of Neo-Confucian ideas of education. Applying the Buddhist theology and the Taoist ontology, Zhu-zi (Chu Hsi, 1130-1200) and his predecessors renovated the ancient Confucianism. The scheme of his ideas was, therefore, called Neo-Confucism. In the framework of the idea, education played an important part. The aim of the education was to pursue the ideal of ancient Kings, by developing the human innate goodness (li) and avoiding interference (qi). Neo-Confucianism was introduced to Korea, Vietnam and Japan, and characterized as a basis for morality and political ideology. In Japan, from the early 1700s, Neo-Confucianism was adopted as an orthodox ideology by Tokugawa Bakufu (government) and was taught at Seido and Takakura-yashiki, later at various schools for samurai and commoners. Muro Kyuso, an advisor to Tokugawa Yoshimune, was a key figure in the educational reform in the eighteenth century. He was a real Neo-Confucianist in the sense of the word. Kyuso translated a Chinese textbook for commoner, which was entitled "Rikuyu-engi-taii", and wrote the textbook for samurai, which was entitled "Meikun-Kakun". These textbooks reveal the typical interpretation of the Neo-Confucian educational ideas.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000089-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

朱子学派教育論の歴史的展開

角 田 多加雄*

A Historical Survey of Educational Ideas of Neo-Confucianism

Takao Sumida

The purpose of this article is to trace the dynamic process in the history of Neo-Confucian ideas of education. Applying the Buddhist theology and the Taoist ontology, Zhu-zi (Chu Hsi, 1130-1200) and his predecessors renovated the ancient Confucianism. The scheme of his ideas was, therefore, called Neo-Confucism. In the framework of the idea, education played an important part. The aim of the education was to pursue the ideal of ancient Kings, by developing the human innate goodness (li) and avoiding interference (qi).

Neo-Confucianism was introduced to Korea, Vietnam and Japan, and characterized as a basis for morality and political ideology. In Japan, from the early 1700s, Neo-Confucianism was adopted as an orthodox ideology by Tokugawa Bakufu (government) and was taught at Seido and Takakura-yashiki, later at various schools for samurai and commoners.

Muro Kyūsō, an advisor to Tokugawa Yoshimune, was a key figure in the educational reform in the eighteenth century. He was a real Neo-Confucianist in the sense of the word. Kyūsō translated a Chinese textbook for commoner, which was entitled "Rikuyu-engi-taii", and wrote the textbook for samurai, which was entitled "Meikun-Kakun". These textbooks reveal the typical interpretation of the Neo-Confucian educational ideas.

* 慶応義塾大学大学院博士課程修了 (教育学)

まえがき

東アジアを中心とした地域の歴史的展開のなかで、儒学はそこに住む人びとの生活様式および思考様式に最も強い影響を与えた要素の一つであることは否定できない。とりわけ教育という視点からみて、少くとも近代以前の一定の、しかも長期にわたる期間において、儒学は教育のなかできわめて重要な位置を占めてきた。しかし、その儒学が体制の内にとり入れられた、すなわち国家の政策のなかにとり入れられはじめたのは中国においては漢代以来のきわめて長い伝統をもつが、朝鮮においては高麗王朝以後、日本においては江戸時代中期に入ってからのことである。朝鮮、日本において、その重大な歴史的変化にとくに重要な役割をはたしたのが朱子学の成立であった。朱子学は中国の宋代において周濂溪（1017-1073年）、程明道（1032-1085年）、程伊川（1033-1107年）、張横渠（1020-77年）らの努力によって発展し、南宋期の朱子（朱熹，1130-1200年）によって完成した、仏教、とりわけ禅家および道家の影響を受け、理論的変革をともなった儒教の哲学体系である。この意味で朱子学は「新儒学」とよばれる。

朱子学は、中国において、その成立以降、陽明学をはじめとするさまざまな学派の出発点となったということだけでなく、朱子学自体もさまざまに理論的発展をとげていく。この傾向は日本においても同様であり、陽明学派のみならず、古文辞学派、心学派など、日本独自の要素の影響をも受けつつ、多様に発展、融合、対立していった。にもかかわらず、幕府において正統とみなされたものはつねに朱子学であった。したがって日本における儒学各派の発展、対立というのは朱子学派との緊張関係のなかで成立したわけである。また、新学派の創始者だけでなく、朱子学派の側においても他学派との対立状況をぬきにして考えることはできない。このような思

想的対立あるいは融合状況のなかでなされた教育のダイナミックな歴史的展開については今後解明されなければならない重要な課題ではあるが、ともあれ本論文においては、まず、多様な思想的発展のつねに中心にあった朱子学派の教育論の歴史的展開について考察していきたいと考えている。

1. 朱子学派教育論の構造

(1) 朱子の教育論⁽¹⁾

朱子の教育論について述べる前に、それと密接に関連する彼の倫理学について簡単にふれておきたい。朱子学の体系のなかで倫理学はその中心的位置を占めている。彼の倫理学の根底にある原理は程伊川から受けついだ「性即理」ということであった。人間もやはり万物と同様、「気」の自己運動の過程から生まれてくるわけだが、「人間」を「人間」たらしめるものが「理」（太極）であり、その「理」が個物に内在している状態を「性」という。朱子はこの人間の「性」、すなわち「人性」について、これを「天命の性」と「氣質の性」に分けて考えるわけである。「天命の性」とはつねに至善なる、先天的な道德性であり、一方、「氣質の性」とは、『論語』における「性、相近シ」という場合の、生まれつきばらつきがあり、気によって影響を受けている、悪に流れがちな「性」のことである。朱子はこの「氣質の性」を存在としては認めるわけだが、「天命の性」を第一義的なものと考えることにより、「氣質の性」を克服し、人間にとってより本質的な「天命の性」への回帰、すなわち「氣質の変化」をすべきだと考えた。

つぎに朱子は、この「天命の性」と「氣質の性」という人間の性についての分類を基礎として、「道心」と「人心」という二つの概念を提出することにより独自の倫理学を展開する。『朱子語類』によれば、「只是這箇心，知覺從耳目之欲上去，便是人心，知覺從義理上去便是道心」（卷七八），

「心、一也。方寸之間、人欲交雜、則謂之人心、純然天理、則謂之道心。」（卷七八）などと述べられているように、「道心」と「人心」の対立状況が存在しているというわけである。この認識のうえに、有名な「存天理、滅少欲」のテーゼが出現するわけである。このテーゼに関して言えば、「天理」は全ての人間が共通して持っているわけであるから、その点では平等主義的な性格を持っているといえるわけであるが、一方で、「理」は表現形態としていわゆる「礼」、すなわち封建的道德規範を示し、かつあらゆる人欲さえも抑圧することを要求しているから、きわめてリゴリスティックな方向性に発展する可能性も存在しているのである。

このテーゼにおけるプロセスを完成させるための方法論が「格物窮理」と「主敬静坐」であった。「格物窮理」とは事物の「理」そのものを認識することであり、このための具体的手段は読書である。それに加えて「主敬静坐」によって情欲を鎮静化させなければならないのである。朱子はまた読書の方法についてもくわしく述べているのであるが、スペースの関係上、ここではこれくらいにとどめておく。そして、このような方法論をもって至る教育の最終目的は、言うまでもなく聖人へと至る道であった。

最後に、以上のような倫理学の構造をもった朱子の教育論においては、学習の段階ということが重視されたことを指摘しておきたい。それは大きく分ければ三つの段階となる。

第一の段階は学齡前教育である。この段階において、朱子は「胎教」の重要性を強調した。

古者聖王将建国有三本、一曰胎教、二曰蒙養、三曰訓導、此三者不可偏廢也。

古者婦女妊子、寢不側、坐不辺、立不蹕、不食邪味、割不正不食、席不正不坐、目不視邪色、耳不聴淫声……如此、則生子形容端正、才過人矣。（『小学集注』立教）

古者聖王将建国有三本、一曰胎教、二曰蒙養、三曰訓導、此三者不可偏廢也。

言うまでもなく、この段階では母親の態度が問題となる。

つぎが「小学」の段階である。『大学章句序』に、

人生八歳、則自王公以下、至於庶人之子弟、皆入小學、而教之以灑掃應對進退之節、禮樂射御書數之文。

とあるが、これは基礎課程であり、とりわけ幼少期においては道德性の習得がその中心となる。

そして、この基礎のうえに「大学」の教育がはじまるわけであるが、ここでの学習の中心は言うまでもなく儒家經典の学習である。同じ『大学章句序』によれば、

及其十有五年、則自天子之元子衆子、以至公卿大夫元士之適子、與凡民之俊秀、皆入大學、而教之窮理正心修己治人之道。

というように十五才において大学に入り、いわば、朱子学的教育論の完成を目指すわけである。

(2) 朱子の教育活動

以上のような教育論を基礎にして、朱子自身が教師として、実際に高等教育と庶民教育に実践的に従事したことは注目しておかなければならない点である。これを角度を変えてみるならば、教育という活動そのものが彼の理論的發展の必然的な結果でもあったのである。それはまた同時に、朱子が当時の学校の状態について「福州之學在東南為最盛、弟子員常數百人、此年以來、教養無法、師生相視、漠然如路人、以故風俗日衰、士氣不作、長老憂之、而不能有以救也。」(『朱文公文集』卷八十)と述べていることからみてもわかるように、社会の安定ということを実現するためにも、教育という活動は非常に重要な意味をもっていた。いわば社会的な要請で

もあったわけである。それでは、このことを少し具体的にみてみよう。

まず、庶民教育については、福建省の漳州に宮吏として在任中（1190-91年）、一般庶民の道徳的教化のために教戒文「勸諭榜」を出したことがあげられる。さらに、朱子は「郷約」を重視したということがある。「郷約」とは地域共同体における規約のことであるが、なかでも有名な「呂氏郷約」をみると、その内容は「徳業相勸、過失相規、礼俗相交、患難相恤」というものであった。ここに朱子は共同体構成員それぞれの道徳性を発現させることにより、安定した社会を目指そうとしたのであるが、この「郷約」に関しては、後に出てくる陽明学派の庶民教化策において利用されたことも興味深い点である。

つぎに高等教育のカリキュラムについても、有名な「白鹿洞書院揭示」などで具体的なかたちで弟子たちに示している。と同時に、彼は『小学』をはじめとして、「四書五経」の注釈をつくったりといった教材づくりを精力的に行なっていたこともつけ加えておかなければならないことだろう。

2. 朱子学派教育論の展開

(1) 朱子学の地理的展開⁽²⁾

朱子学派教育論は、以上述べたようなかたちで中国では宋代において成立し、元・明・清のそれぞれの王朝において六百年余にわたり、国家の正統派イデオロギーとして発展していくわけであるが、一方で、この朱子学は中国のみならず、国外へ、すなわち朝鮮、日本、ヴェトナムなどへ伝わり、発展していった。日本については次節で扱うことになるのでここでは朝鮮、ヴェトナムでの展開について簡単に検討しておきたいと思う。

朝鮮半島は地理的にみて、中国と隣接しているがゆえに、中国の文化思想が直接伝わるのが可能な位置にあった。したがって、儒教も紀元四世紀にはすでに伝わっていた。にもかかわらず、日本と同様、長い期間にわ

たり仏教の勢力が非常に大きかったために、国家が儒教に関与してくるのは高麗王朝(918-1392年)に入ってからのことである。高麗の成宗(981-997年)は国子監をおき儒学の教授を行なわせたが、さほど成果はみられなかった。だが、高麗王朝末期に入り、忠烈王(1274-1308年)の時代に入ると、儒臣であった安珦(1243-1306)年が儒学振興策をとり、朱子学の導入をはかることによりようやく儒学が一定の勢力をもちはじめようになった。これ以降、朝鮮の儒学は朱子学一色という状況が出現する。つぎの李朝王朝期(1392-1910年)に入ると、この傾向は動かしがたいものとなり、太宗は最高学府としての「成均館」と「五部学堂」(東西南北中の五部、後に北部学堂は廃止となり、四部学堂となる。)をソウルに新築し、儒学を振興した。次の世祖は1446年の「訓民正音」の発布という大事業をなしとげた人物であるが、これにより儒学をはじめとする諸文献を翻訳し、一般に普及するようにした(「諺解」)。だが、何といたっても朝鮮における朱子学の発展において注目されなければならないのは中宗・明宗の時代であろう。この時期に朱子学研究は最盛期をむかえ、李退溪の四端七情論(主理派)と李栗谷の「理気二元論」(主気派)が対立し、それぞれ学問的に発展をとげていくことになる。周知のように、李退溪の思想は山崎闇斎をはじめとする日本の朱子学者に多大な影響を及ぼした。では、このような発展の道をたどった朱子学の教育は具体的にはどのように行なわれたのだろうか。

朝鮮において、子どもは七、八才から「書堂」(日本の寺子屋にあたる)において漢文と習字を習い、十五才から「郷校」において儒教経典を読み、ついで科挙試験に合格した後、成均館などの高等教育機関でさらに高度な儒教の教育を受けるわけである。また、教材としては、初等教育においては小学、孝経などのほか、朝鮮の現実に即した『礼記浅見録』なども使われたようである。

一方、ヴェトナムにおいては朝鮮よりもさらに早く、中国の前漢から後

漢のはじめにかけて古代儒教思想が伝わった。だが仏教も長いあいだ強い力を保っていたために、李朝（1010-1225年）において中国にならい科挙試験を行なったが、まだ力を得るには至らなかった。しかし、次の陳朝（1225-1400年）にいたってはじめて官学から私学にいたるまでの儒教教育制度が整った。元の汪大淵による『島夷志略』に「俗尚礼義，有中国之風，……凡民間俊秀子弟，八歳入小学，十五歳入大学，其誦詩讀書，談性理，為文章，皆与中国同」と書かれているように、それはきわめて中国の制度に近いものであった。と同時に、南宋に隣接した地域であるがゆえに、朱子学が直接伝わってきたこともみてとれる。1253年には「国学院」が設けられ「四書五経」が教材となり、また、十四世紀末までには科挙の制度も整備されてきた。この時期、字喃チニノムを用いた国語文学が興ってきたことも注目する必要があるだろう。ついで胡氏による政権篡奪、明による支配を経て黎朝（1428-1527年，1532-1789年）が成立したが、黎朝の太祖は有能な人材の育成のため「国子監」，「路学」などの諸学校を設け、儒学教育を熱心に行なった。そして、ついにこの黎朝において朱子学は官学の位置につくのである。

(2) 日本における朱子学の展開と教育政策の成立⁽³⁾

さて、日本において、朱子学は十三世紀のはじめに伝来したが、その研究の主体は五山の禅僧を中心とする僧侶たちであった。それゆえ、その解釈にも仏教的な色彩の強い面があった。近世に入り、本格的な朱子学の受容がはじまったのも、やはり禅僧から還俗した藤原惺窩、林羅山の努力によるものであるが、まさにこの二人によって日本朱子学の発展の基礎がつくられたのであり、この基礎のうえに、これ以降、朱子学の解釈をはじめ、さらには儒学自体に対する根本的なとらえなおしの作業が、きわめて広範に、かつ比較的自由なかたちで行なわれていくのである。

この論文で取り上げている享保期までをみても、藤原惺窩、林羅山を祖

とする林家朱子学、朱子学をその理論的中心としつつも神道的要素を加えて独自の思想世界を形成した山崎闇斎、朱子学を出発点としつつもその理論構造の再構成を行ない古文辞学派を形成した荻生徂徠をはじめ、巨大な思想家群が現出していくわけである。

だが、このような思想の多様な発展のなかでも、つねに幕藩体制イデオロギーの中心であり、その立場から現実の政治、教育に関わったのは林羅山を出発点とする朱子学派であった。ところが林家朱子学そのものは、近世中期ともなるとその理論的硬直化によって、幕府の政策に対しても何のインパクトを与えるものではなくなってしまった。それにかわって出てきたのが木下順庵門下の、いわゆる木門の朱子学者たちであった。なかでも筆者が朱子学の展開という点からみて注目したいのが室鳩巢である。彼は享保改革期において、徳川吉宗のブレーンとして幕府に大きく関与したわけであるが、その政策論は必ずしも現実に適合的であったわけではない。ただ、彼の思想的態度において、他学派（陽明学派、徂徠学派、闇斎学派、さらには仏教までも）を排除し、まさに朱子学に忠実たらんとしたという点で、日本における朱子学の典型的思考様式をみることができると考えられるのである。さらに、ここで考えておきたいことは、日本の教育史上、はじめて庶民をも視野に入れた体系的教育政策が生まれた時代であったということである。この教育政策の成立にとりわけ深く関わったのが、林家の朱子学者ではなく、木門の室鳩巢だったのである。

それではこの時期の教育政策にはどのようなものがあつたのかを少し具体的にみていくことにしよう。

まず、元禄期に設立された林家の聖堂での講義の不振に対する対策として、享保四年（1719年）十一月、木門を中心とした儒者に命じて八重州河岸の高倉屋敷で連日講義を行なわせた。これは聖堂における講義とはことなり、毎日庶民に対しても開放されていたのである。（一方、聖堂の講義も丁の日を直参、半の日を士庶入込みと定めた）

つぎに、中国における庶民教化用の教訓書であった『六諭衍義』を享保六年（1921年）、荻生徂徠に訓点をつけさせ、室鳩巢に和訳させ、享保七年（1922年）、『六諭衍義大意』と題して出版させ、これを江戸市中のみならず各地の手習師匠に手本として用いるように命じた。さらに、享保八年（1923年）には菅野兼山の深川の私塾会輔堂（庶民向けの儒学塾）に三十両の援助を行ない、同十一年には三宅石庵の塾懷徳堂を準官学として保護したりもした。

ところで、ここでなぜ近世中期に至って、はじめて庶民をも視野に入れた教育政策が生まれてきたのかということについて少し考えておきたい。それにはいくつかの理由が考えられる。

第一の理由としては、日本において朱子学は藤原惺窩、林羅山を出発点として発展し、支配者層に導入され、体制内化していったわけであるが、初期の朱子学者たち自身は中世的＝仏教的世界から生まれてきた学者たちであり、朱子学の理解そのものにも仏教的色彩がみてとれる。このような段階の朱子学理解においては学問と政策との関連にまで自己の学問を発展させられなかったことは疑いない。そして、その後の急速な体制内化によって、その思想が未完成なまま硬直化してしまうという状況が生じた。そうしたことを反映しているのが近世中期における聖堂の様子であったといえるのではないだろうか。

第二の理由として、朱子学の学問的分析の対象となるべき幕藩体制が、体制として完成途上の段階にあり、少なくとも近世初期においては、中国の朱子学の出発点となったような封建制的な危機は登場してこなかった。しかし、17世紀もおわりになると、商品経済の発展によって農村における両極分解、幕府・諸藩財政の窮乏化といった封建体制内における危機が明らかとなり、自己正統化および支配のためのイデオロギーとしての朱子学の役割が重要になってくるわけである。つまり、その役割が理論というワクのなかにもはやとどまっていることができなくなり、より現実の社会に

対して目を向けていかなければならないという事態が出現してきた。

第三に、享保の改革の指導者であった徳川吉宗自身はたしかに自己の儒学学習得に対して熱心であったとはいえないが、それを統治のために十分に利用したということは認められるところであろう。いいかえれば、彼は儒学に対して全く実用主義的な態度をとったということである。付言しておくならば、教育そのものからは少しそれるが、彼は蘭学の振興をはじめとして、内外の自然科学的知識をも学者達に研究させ、出版させたり、古文書、古書籍なども蒐集し、紅葉山文庫にあつめた。

第四に、当時、庶民の側からも教育に対する要求が高まってきたことがあげられるであろう。初等教育機関としての寺子屋の数が増大していくのはもう少し後のことであるが、いわゆる中等程度の教育をほどこすための「郷学」が出現してくるのがこの享保期であった。享保二年（1717年）、摂津平野郷に設立された含翠堂や、先にふれた江戸の会輔堂、大阪の懷徳堂などが創立されたが、こうした動向は幕藩体制側からの教育に対する関心とは別の文脈、すなわち庶民の側での人間的な自覚に基づく教育に対する関心から生まれてきたものと考えられる。同じくこの時期に成立した石門心学の急速な普及ということもそうした事情をよく示す例といえるであろう。

(3) 朱子学派の学校論と教訓書にあらわれた教育論

それでは最後に、日本における朱子学の展開のなかで生み出された、享保期の教育政策の背景となった教育論を考察していきたい。それを先ほど取り上げた、日本における朱子学完成期の典型的な思想家と考えられる室鳩巢の思想を通して考えてみたい。その理由は二つあり、第一は、彼が吉宗によって享保期に行なわれた教育政策のなかで唯一幕府の中枢に近づくことのできる儒者であったということである。先に少しふれたが、鳩巢は高倉屋敷における講義を出発点として、のちに將軍の侍講となり、政策上

のさまざまな点について諮問をうけ、それに答えている。(荻生徂徠も、このとき同様に吉宗から諮問をうけ、それに答えている。このなかには教育にかかわる問題も多くふくまれているのだが、筆者が今回取りあげている朱子学派とは立場が異なるので、今後の課題としたい)

第二に、鳩巢の思想が、真の意味で当時の成熟した朱子学の発展状況を示していると考えられるからである。少なくとも彼が幕府において活躍していた時期においては、彼をいわゆる忠実な朱子学者とみることは認めてよいところであろう。(もっとも、晩年においても、『駿台雑話』にみられるように、この態度は基本的には変化することがなかったにせよ、たとえば『不亡鈔』、あるいは『太極図述』にみられる彼の思想の変容については、今後さらに検討が必要である)

以上のような理由から、鳩巢の思想をいわゆる正統派朱子学の教育論の典型として考察を進めていきたい。方法としては、まず、彼の学校論を取り上げ、つぎに彼の教育の具体化ともいうべき、彼の筆による二つの教訓書を取りあげて考察したいと考えている。

さて、享保期、林家の聖堂の状況が不振をきわめていたことは先に少しふれたが、期待をこめて新設された高倉屋敷の講義も、聴講者の人数という点でみると全くのあてはずれであった。この時、吉宗の諮問に答えて木門一派の出した献策は次のようなものであった。

とかく講釈仕候は、いか様共私ども料簡可有之候。聴衆の義は、私共力に不及申儀、指当り今少し急度被仰出候者、承申者可有之候。只今の様に勝手次第に可罷出杯にては、向後も聴衆も有之間敷奉存候。大番中番の頭中へ被仰渡、御旗本中、学文仕様候に被遊度被思召候はば、頭中初め隙の時分は罷出可承候。勿論支配へは御番等の隙には、心懸候て罷出承り候様に被致候はゞ可然などと、御老中より被仰渡候はゞ、先いやとも可罷出候。其内会得いたし実に志し候も出来可申

候。是より外に聴衆有之候には仕候様は無之旨申候。（『兼山秘策』第五冊）

もはや手の打ちようもなく、何とかして出席させようとして上の命令にたよるのみであった。もちろんこれでは吉宗の賛意は得られなかったことは言うまでもない。吉宗の考え方は次のようなものであった。

学問と申物は、権威を以て人にさせ候ては何の益も無之候。面々に信じ候て自然に趣き不申候ては、仕形ばかりに罷成申候。既に常憲院様御代人々に無理に学文被仰付候て、殊外難儀致し、至干今懲り申候様に罷成候。外の所存を申上候様にとの儀に御座候。（『兼山秘策』第五冊）

それでも、出席強制論をとる鳩巢の考え方は変わることがなかった。

只今の風俗にて、中々自然に信じ候て趣申者は有間敷候。先一応御威勢にて被仰付、其内世上にはやり出候はゞ、自然と趣き申様にも可罷成。父の子に学文為致候様成事にて候。いやがり申者を初はしかりなどいたし無理にさせ候へば、後には己と合点いたし候様に罷成申候。

子次第にいたし候ては学文好申事は無之物にて候。（『兼山秘策』第五冊）

いうまでもなく、朱子学的な立場からすれば、指導者が学問を通して聖人に近づこうと努力するのはあまりにも当然の態度であり、この意味では、現実に対していらだちをおぼえている鳩巢の姿勢にも若干同情せざるをえない面もある。だがやはり現実 is 現実なのであり、その意味では鳩巢も、もう少し具体的かつ実現可能な、効果の期待できる案が出せなかった

ものだろうかとも思う。安易に当局の姿勢に教育活動の指導権をゆだねてしまうということに、中国本来の朱子学のあり方とは決定的な立場上の差異が存在しているという見方もできるのではないだろうか。

もちろん、この局面では少しの弱さをみせた鳩巢も、他の局面では、さらに具体的なかたちで朱子学的教育論の実現に努力したのである。それが、庶民用教訓書『六論衍義大意』の和訳と武家用教訓書『明君家訓』の執筆である。

『六論衍義大意』について、筆者は別稿においてその伝来のあらましと、内容の分析について述べたことがあるので簡単にふれておくにとどめるが、『六論衍義大意』とは、「六論」、すなわち「孝顺父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、毋作非為」の六条目について簡単に、分かりやすい説明を加えた庶民用教訓書であり、この書の出版された享保期以降、おびただしい普及をみせたものである。一つだけ、ここで確認しておきたいことは、この書の原本である『六論衍義』が、陽明学の影響の強いものであったにもかかわらず、鳩巢の和訳により、朱子学的な要素と、さらに「忠」といった、本来のものにはなかった日本的要素が混入していることである。このことからわかるように、鳩巢ほどの朱子学に忠実たらんと努力した学者であっても、それが受容の対象になったという点において、日本における朱子学のあり方は、当事者の認識を超えて、きわめて柔軟なものであったようである。

それでは次に『明君家訓』⁽⁶⁾に示された教育論についてみてみよう。『明君家訓』はもともと鳩巢が加賀藩に仕えていたころの元禄五年(1692年)に『楠諸士教』という題名で書かれたものであった。その後、正徳五年(1715)に『明君家訓』という書名になり出版されたものである。この書が幕府の中枢において高い評価を得ていたことを、鳩巢自身が次のように書いている。

此書板行候て十年余にも可相成候、只今迄しかと見ものも無之所に、ふと御近習に取はやし候故、俄に江戸中流布致し候、とかく万事時節と申事有之と奉存候、……其に付御近習の衆へ縁にて右明君家訓を遣申候、何卒斯様の筋上へ達候様にと奉存候、大方上覧にも及可申と珍重に候由物語にて候、此筋にて御覧被遊候哉、御覧被遊簡要成事どもに被思召候由、且又御近習の者へ求候て見候様にとの御下知有之と聞へ申候、其以後御近習衆家々に求候故、御城へ罷出候程の者求申候…
(兼山秘策』第五冊)

さて、この『明君家訓』は、まさに武家用の教訓書であり、全体を通してみると、基本的には武士の儉約、道義の重要性を強調したもののだが、前半の第二条に学問論について書かれた部分がある。ここでの教育論の展開をみるかぎり、鳩巢は完全に朱子の教育論の立場に立っていることがみてとれる。

まずはじめに、鳩巢は学問の重要性について述べている。

凡家中の士、不択貴賤学問をいたすべく候。学問とは別にかはり申儀はこれなく候。

学問は、右申通、人たる所の道にて、人と生れたるものこれを不知不行では偏に禽獣の有様にて候。しかれば朝夕衣食より急用なる儀と可心得候。

このようにすべて武士たるもの、学問を行なうべきであるとし、学問を行なうことの重要性について述べ、さらに、その原則が人間一般にまで拡げて考えられている。つづいて現状に対する批判を展開している。

人たる所の道にて候えば、朝夕第一に可心得の処、脇の儀の様に心得、学問不仕候ても、其分と存罷有体に候。不吟味なる儀不過之候。

この書は元禄五年（1692年）に書かれたものであるが、先の学校論でふれた武士の学問に対する不熱心な状況と皮肉にも一致しているところが興味深い。さらに、鳩巢は現状での学問のあり方、および学問に対する武士の側の態度に対しても批判的な見解を示している。

さりながら当代、学問仕由申輩に、結句不学問の人よりおとり申もの有之候。其故は、此人元来をのれが才智にはこり、名利の心深して、不学なりと人の申を無念に存、書籍をとりあつかひ、少々文字を知、古書ども端々覚候て、人をあなどりをのれに傲るたすけといたし候。才智有之上に文芸も有之候へば、能士の様に見へ候得共、実は仁義の心なくして、偏に盗人の振舞に候。さればこそ拔群不学の人にはおとり申候。其外は、あるひは詩文をつくり、或は書籍を翫て、徒に日を渉る輩有之候。これは一向慰に仕るまでにて、何の益も無之事候。

つづいて述べられている学問の方法論については、まさに朱子の人性論を受けついだものである。

扱、其修行の法は、心身の工夫とて、こゝろの邪正、身に行ところの善悪、此等の吟味をいたし、心をたゞしうして身を治て、古の賢人君子にも及び、又は其人の心懸次第に、聖人にもいたる道にて候。先学問はかくのごとくのわけにて、此外に学問といふもの無之候と心得申事、肝要に候。

さらに具体的には、

しかれば、書をよみ候も、古の聖賢の御言葉を種として、心身の工夫をせんためなれば、小学、四書、近思録のたぐひを熟読いたし、余力あらば、五経などにも及、其義理を尋、一字一句も今日の上にひきうけて、悉修業の為にいたし候こそ、真の学問と申べく候。右の外書籍あまり不入事に候。

と述べ、読書についてもその内容まで詳しく述べられている。つぎに興味深いことに、朱子の学習段階論をふまえていると思われるが、この『明君家訓』が一定年齢以上の武士を対象としているという限定のもとでの年齢別の学習方法についても述べている。

殊に四十以上の人、精力もすくなく候へば、小学、四書、近思録ばかりにて能候。然其段は氣根次第に候。

六十より八九十の人はおほかた老衰いたすものに候へば、大学、論語までにて、又は一部にて自分に熟読いたし、其外は人の物語にて聞候ても同事にて候。

そして最後に、学問そのものよりも、その前提としての道徳が強調されていることも重要である。

学問はかならずしも文字の上に有事にては無之候。一日なりとも命の内に、此道をさとり候て相果候はゞ、生たる甲斐有之候。百年存命候とも、無学にて人たる道も不存候はゞ、何の益なき事にて候。されば志ある士は、勤学油断仕るまじき儀にて候。

以上、近世中期に出版された朱子学の立場にたつ代表的な二つの教訓書

をとりあげて、その教育論を検討してきたが、今後はこれらの教訓書が、どの程度の範囲で広まり、また、どのようなかたちで具体的に教育のなかで使われていたのかということについての実証的な調査という問題が克服されなければならない。

ともあれ、中央に位置していた朱子学派の儒学者の教育論をみるかぎりにおいては、一方で、かぎりなく朱子本来の教育論にできるだけ近づこうとする態度がみられる。このことは現実においては、一面的なリゴリズムにおち入りかねない危険性をはらんでいる。だが一方で、幕藩体制の成熟とその危機の出現にともなって、その背景を中国の歴史的事情にもつ朱子学が、日本の歴史的文脈にふれることにより、より柔軟な対応をせまられ、変容していくという方向性もみてとれるわけである。日本における、これ以降の、朱子学を中心とする思想の多様な歴史的展開というのは、日本的朱子学のあり方のこの二面性が複雑にからみあって形成された、一つの独自の思想空間であったと考えられる。

だが、ともあれ、これらの教訓書が、体制において受け入れられ、しかも近世を通じてきわめて広範に普及していったという事実⁽⁷⁾が示すように、ここに日本的朱子学派教育論の一つの完成形態をみることも不可能なことではない。

あ　と　が　き

以上、近世中期までの朱子学的教育論の歴史的展開を大まかに考察してきたわけだが、以下、今後に残された問題点を指摘して本論のしめくくりとしたいと思う。

まず第一に、考察の対象が各国における中央の動向に限定されているがゆえに、今後はその教育論が現実のものとして、歴史的、地理的な展開のなかで、どのように具体的にあらわれてきたかを、これまでの地方教育史

研究の蓄積にもとづいて再構成していかなければならないだろう。

第二に、本論文では、朱子学派を中心としてその教育論を考察してきたわけだが、他学派について、あるいはそれらとの関連についてはスペースの関係上、省略せざるをえなかった。とりわけ日本においては、この視点をさけて通ることはできない状況があるので、これも今後の課題としたい。

ともあれ、今後、朱子学のみならず、そこから発展していった陽明学をも含め、儒学的教育論の展開を、東アジア世界のなかでとらえなおすという、比較思想史的研究がさらに進展していくならば、現代のわれわれのおかれた位置、その行動様式、思考様式を解明していくための重要な分析手段が得られるものと確信している。

注

- (1) 朱子の教育論については今後さらに詳しい分析が必要であるが、筆者が参考にした最近の中国語文献に次のようなものがある。周徳昌『朱熹教育思想述評』（吉林教育出版社，1987年），宋本成・鄧永凱『中国古代教育家 教育及教学思想評介』（内蒙古教育出版社，1984年），楊榮春『中国封建社会教育史』（広東人民出版社，1985年），邱椿『古代教育思想論叢』（北京師範大学出版社，1985年），陳正夫・何植靖『朱熹評伝』（江西人民出版社，1984年）。また、朱子の教育活動とその意義について論じたものに、Wm. T. ドバリー『朱子学と自由の伝統』（山口久和訳，平凡社，1987年）がある。
- (2) 朝鮮，ヴェトナムへの朱子学の影響については、中国語文献として楊煥英編著『孔子思想在国外的伝播与影響』（教育科学出版社，1985年），また日本語文献としては、三浦国雄『朱子』（人類の知的遺産19，講談社，1979年）中の第四章「後世への影響一朝鮮朱子学の展開」，藤堂明保『漢字とその文化圏』（光生館，1971年）がよくまとめられている。朝鮮教育史の研究書としては、渡部学『近世朝鮮教育史研究』（雄山閣，1968年），田花為雄『朝鮮郷約教化史の研究 歴史編』（鳴鳳社，1972年），『朝鮮教育史』（世界教育史大系5，講談社，1975年）をはじめとして多数出版されているが、ヴェトナム教育史については、とりわけその近世以前の状況については今後に残された研究テーマであろう。

- (3) 日本における朱子学の位置については、近年比較思想史的研究がはじめられているが、文献としては王家驊『日中儒学の比較』(六興出版, 1988年), 渡辺浩『近世日本社会と宋学』(東京大学出版会, 1985年) などがある。
- (4) もちろん、江戸幕藩体制の初期から、朱子学がいわゆる「官学」になっていたわけではない。幕府と朱子学との関係についての従来の通説に対する批判を述べたものに、宮崎道生『近世近代の思想と文化』(ぺりかん社, 1985年), 長尾龍一「江戸思想における政治と知性」(『講座日本思想』第2巻, 東京大学出版会, 1983年) などがある。
- (5) 拙稿「六論衍義大意前史—六論衍義の成立と、その日本伝来について—」(慶應義塾大学大学院社会学研究科 紀要第24号, 1984年), 拙稿「『六論衍義大意』についての教育思想史的考察」(慶應義塾大学大学院社会学研究科 紀要第29号, 1989年)
- (6) 『明君家訓』の教育史における意義については、その書誌学的研究とあわせて今後の課題といえる。本論文の引用はすべて『近世武家思想』(石井紫郎校注, 日本思想体系, 岩波書店, 1974年) によった。
- (7) 最近、「六論衍義大意」の地方での展開に関する研究が進みつつある。たとえば、井上久雄「六論衍義大意異本の研究—芸州版教訓道しるべと武州版六教解」(広島修大論集第29巻第1号人文編, 1988年)